Ⅱ　相模湾・東京湾水産海洋調査研究に関する研究会

日　時　　昭和４４年８月２９日　１３：００～１７：００
場　所　　東海区水産研究所　第２会議室
コンビーナー　平　野　敏　行
出席者　　約４０名

話題および話題提供者

1. 相模川酒匂川河口海域における拡散形態　　原　口　明　郎（神奈川県水産試験場）
2. 東京湾における取水および油濁問題等について　　関　達　哉（千葉県内湾水産試験場）
3. 海上における油の漂流について　　倉　品　昭　二（海上保安庁水路部）
4. 流出油処理剤の毒性について　　大久保　勝　夫（東海区水産研究所）
5. 取水等にともなう河川水拡散に関する問題　　平　野　敏　行（東海区水産研究所）
6. 綜　合　討　論

１　相模川、酒匂川河口海域における拡散形態

－第１次希釈について－

原　口　明　郎
（神奈川水試）

１　まえがき

首都圏人口過密の影響を受け、神奈川県では昭和５０年において１日当たり水需要を７００万屯と見込み、現在の水源４００万屯では３００万屯不足することが明らかになつた。このため第三次総合計画の一環として相模川の寒川堰を５０cmかさ上げして１００万屯、酒匂川の方には相模湖相当の酒匂ダム（仮称）を建設し、飯泉に堰を設け２００万屯を取水し不足の３００万屯を補う計画が立案された。

このため取水による水産側の影響として天然のアユ遡上は阻害され、相模湾のプランクトンが減少して沿岸漁業の不振を招くことが懸念された。この事態を明らかにするため河川水の拡散状態の現状把握が必要になり、また全面取水になつた場合の水質、生物相変化の予測が求められるに至つた。